## Vol.3　開拓

会場 両国門天ホール

2023年2月11日(土/祝)　16:30開場 17:00開演

助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京［スタートアップ助成］
後援：東京藝術大学音楽学部同声会
主催：Register Trio
デザイン：山田サトシ

ARTS COUNCIL TOKYO

# プログラム

稲森安太己 Yasutaki Inamori

スキャピュラ
Scapula

権代敦彦 Atsuhiko Gondai

永遠の賛歌
Perpetual Adoration

森紀明 Noriaki Mori

問うことはなぜ無意味なのか？
Warum ist das Fragen sinnlos?

休　憩

小林由直 Yoshinao Kobayashi

合いの手 ～無伴奏クラリネットのための
Short Interlude ~ for Clarinet solo ~

向井響 Hibiki Mukai

鏡の中の鏡
Miroir dans le Miroir

（Register Trio 委嘱作品 ）

稲森安太己 Yasutaki Inamori

スキャピュラ
Scapula

「スキャピュラ」とは肩甲骨を意味するラテン語（ここでは英語読み）である。肩こりに効くと言われる「肩甲骨剥がし」を日頃行っている人たちの肩甲骨の可動域は大きい。そのゴキゴキした動きを見ていると痛そうにすら見えるが、逆にそのように肩を動かせない人こそ肩こりに苦しむ。私の音楽『スキャピュラ』は、ポリリズムによる擬似的な複合テンポで、3人の奏者が噛み合いどころを探りながら進行していく。次第に各楽器の使用音程が拡がって、より滑らかに歯車が噛み合っていく。あたかも件のエクササイズをしているうちに可動域が広がった肩甲骨のようでもあり、その動きの厳つさも消えはしない。最後に深呼吸のようなロングトーンが奏者のあがった息を整える。

権代敦彦 Atsuhiko Gondai

永遠の賛歌 ヴァイオリンのための 作品 108（2007）
Perpetual Adoration for violin op.108（2007）

委嘱：22 世紀クラブ
初演 :2007 年 9 月 15 日 東京文化会館 堀米ゆず子

2005 年夏、大阪の附属池田小学校事件で、突然絶たれた幼い命へのレクイエムとして、「子守歌」という大きな曲を書きました。
お母さんの腕が、大地が、そして宇宙ぜんぶが、そこで散った命をしっかり抱きかかえ、魂の安らぎが得られることを願った曲でした。
まだ 8 歳だった娘を、突然奪われたお母さんが、亡くなったその子に宛てた手紙をもとに作曲しました。
そこには自分の心の中で「ずっと」一緒だということが書かれていました。

この「ずっと」が今でも僕の耳には鳴っています。
この「ずっと」が「永遠 =Perpetual」です。

「子守歌」そして今日演奏される「永遠の賛歌」の作曲中、僕は、「突然」絶たれた命と、宗教がよく救いを説くときに持ち出す「永遠の命」との比重のことをいつも考えていました。
あの「突然」の重さを、果たしてこの「永遠」という概念で救いとることが出来るのか？「永遠の賛歌」は、そんな僕の「永遠」への信仰と懐疑がメチャクチャに雑ざった曲、「永遠」へのチャレンジです。
血とともに散った命に、中空を紡径い続ける魂に向けて差し出す、ほんの「一瞬」の音楽ですが、それが繰り返されることで「永遠 = ずっと」を掴んでみたいと思いました。

## 森紀明 Noriaki Mori

### 問うことはなぜ無意味なのか？
### Warum ist das Fragen sinnlos?

カフカが 27 歳の時に書き始めた日記には、病弱で、家族や友人から孤立し、人間関係もうまくいかない日常の様子が書き綴られており、彼の小説から受けるイメージとはまた異なるカフカ像を見出すことができます。日記は死の前年まで書き続けられ、彼の日常的な悩みや不安のほかにも、小説のスケッチや哲学的な考察から彼が見た夢の記録に至るまで、様々な事柄が書かれることになりました。本作品は、カフカの日記から引用した以下の断片的なテキストがタイトルとして付けられた、長さとキャラクターの異なる 4 つのモノローグから構成されており、全て続けて演奏されます。

“Nichts als ein Erwarten, ewige Hilflosigkeit.”
ある期待のほか何もなし、永遠の寄る辺なさ。

“Der Anruf”
呼びかけ。

“Alles zerreißen.”
何もかも引き裂くこと。

“Im Frieden kommst du nicht vorwärts, im Krieg verblutest du.”
平和な時にはお前は前へ進まない。戦争の時には出血多量で死ぬ。

---

## 小林由直 Yoshinao Kobayashi

### 合いの手 ～無伴奏クラリネットの為の～
### Short Interlude ~ for Clarinet solo ~

クラリネットの鋭く高い音の間に短く低い音を「合いの手」のように挿入することにより、コミカルで躍動的な表現を試みました。次に現れる静かな部分では、様々な長さの休符を挟みながら、いろいろなフレーズが時にはのびやかに、時には訥々と歌われ、時々思い出したように「合いの手」が入ります。ここでは、グリッサンド、重音、息の掠れるような音、舌を震わせる濁った音など、様々な奏法が使われ、多彩な音を交えながら進行していきます。やがて、短い音の断片が融合・発展して次第に長くなり、遂には風のように空間を駆け抜ける長い音階になります。その後、ゆっくりとした時間を経て再び「合いの手」が入るコミカルな部分が現れます。次第に緊張と興奮を高めていきますが、最後にはフッと風の中に音が消えていきます。
「合いの手」が、作品全体の良きスパイスになってくれればと思います。クラリネットたった一本により繰り広げられる音の世界をお楽しみください。

## 向井響 Hibiki Mukai

### 鏡の中の鏡
### Miroir dans le Miroir

タイトルは、私の愛してやまない作家ミヒャエル・エンデの、30 の短編からなる作品「鏡の中の鏡」より。

前の話の何処かが糊代のように次の話に重なっていき、ずるずると繋がっていく。その光景は頭の中で、カメラマンがぐっとアングルやズームを変えたような違和感を覚える。話の焦点が目まぐるしく変わっていき、いつしか、読者は段々と自分の世界から離れて無意識の世界に連れ込まれる。

私は、30 の小さなモチーフを、組み合わせたり、拡大、縮小したり、時に変奏させて、音楽を紡いでいった。それは、鏡像のメタモルフォーゼであり、重なっても触れ合うことなく、交差しても縫れることのない永遠のパターンの反復を、今回特別な仕掛けを用いたトリオで描くことを試みた。

# Register Trio

©Milagro Elstak

## 髙岸卓人 Takuto Takagishi - ヴァイオリン -

滋賀県彦根市出身。東京藝術大学を卒業。東京藝術大学大学院修士課程、デン・ハーグ王立音楽院修士課程を修了。東京藝術大学卒業時に同声会賞を受賞。平成 27 年度滋賀県次世代文化賞を受賞。クフモ室内楽音楽祭、パシフィック・ミュージック・フェスティバル、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭オーケストラアカデミー等に参加 。これまでにヴァイオリンを福田みどり、戸澤哲夫、野口千代光の各氏に、バロックヴァイオリンを若松夏美、寺神戸亮の各氏に師事。オランダ・バッハ協会の 'Young Bach Fellow' プログラム 2019-2020 シーズンのメンバー。アルペリ弦楽四重奏団メンバー。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団団員。

©Ayane Shindo

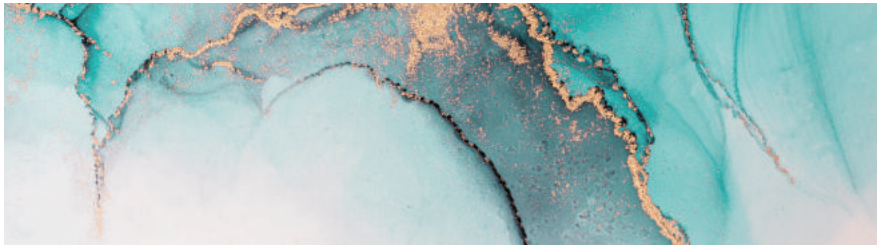
## 東紗衣 Sae Higashi - クラリネット -

首都圏を拠点に多岐にわたって活動を展開するクラリネット奏者。近年においては国内オーケストラの客演首席、NHK-FM 「リサイタル・パッシオ」、ドラマ・映画・ゲームなどの劇伴レコーディングに参加するなどクラシックからポップスまで幅広い分野で活動している。兵庫県立西宮高校音楽科、東京藝術大学音楽学部器楽科、同大学院音楽研究科修士課程を経てケルン音楽大学を最優秀の成績で卒業。2013-15年兵庫芸術文化センター管弦楽団コアメンバー。2014年度青山音楽賞新人賞受賞。アルバム「Klangfarben～響きの彩～」は各種配信サイトにて発売中。公式ウェブサイト saehigashi.amebaownd.com

©Haruna Shinoyama

## 小塩真愛 Mai Koshio - ピアノ -

東京藝術大学卒業、同大学院修了。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学修士課程、同大学ポストグラデュエイト課程修了。ピティナ・ピアノコンペティション E 級金賞、G級銅賞、特級銀賞及び聴衆賞受賞。マウロ・パオロ・モノポリ国際コンクール2位受賞。アミグダラ国際ピアノコンクール 1 位受賞。フィオレンティーノ国際コンクール 1 位受賞。これまでに藝大フィル、東京シティフィル、ドナウ交響楽団、プーリアフィルハーモニカなど、オーケストラと共演する他、多数のリサイタルや演奏会に出演。2021年6月に KNS Classicalより初のアルバム「Lumière」をリリース。現在、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、大阪音楽大学非常勤講師。



# 作曲家

## 稲森安太己 Yasutaki Inamori

1978年東京生。東京学芸大学で作曲を山内雅弘氏に、ケルン音楽舞踊大学で作曲をミヒャエル・バイル、ヨハネス・シェルホルンの両氏に師事。作品は西部ドイツ放送交響楽団、ギュルツェニヒ管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団などの演奏団体によってドイツ、イタリア、アメリカ、ベルギー、日本ほかで演奏されている。2007 年日本音楽コンクール第1位、2011 年ベルント・アロイス・ツィンマーマン奨学金賞、2019 年 芥川也寸志サントリー作曲賞ほか。現在、洗足学園音楽大学非常勤講師。

## 権代敦彦 Atsuhiko Gondai

1965 年生まれ 。17 歳で「アヴェ・マリア」Op.1 を作曲して以来、一貫して「有限の生命、有限の音楽時間」における「死・終焉」と「永遠・無限」との関係を創作の中心主題に据え、カトリック信仰に根差しつつも、様々な宗教を横断する独自の死生観・時空観念による音楽の創作を試みている。オラトリオ、オーケストラから室内楽・独奏曲に至る様々な器楽曲、合唱曲、また古楽器、復元古代楽器や邦楽、雅楽、仏教声明に至るまで、あらゆる分野に及ぶ作品が 190 曲程ある。

## 森紀明 Noriaki Mori

現代音楽、ジャズ、即興音楽の間で主に活動する作曲家、サクソフォン奏者。自身のバックグラウンドを活かした幅広いアイデアをもとに、作品ごとに異なる作曲手法や素材を援用し、様々な芸術分野を超えて作品を発表している。これまでに作品は、ダルムシュタット現代音楽講習会、アハトブリュッケン音楽祭、モントリオール・ジャズ・フェスティバル、武生国際音楽祭を含む北米、ヨーロッパ、東アジア各地で演奏され、WDR3 でも放送されている。

## 小林由直 Yoshinao Kobayashi

1961 年生まれ。4 歳よりピアノを始め、後にピアノを針谷宏弥、作曲を田中照通に師事。1984年日本マンドリン連盟（JMU）主催第4回作曲コンクール入賞。以後、マンドリン合奏やマンドリンを含む室内楽作品を多く発表し、合奏作品は全国の大学や社会人団体で演奏されている。独奏および室内楽作品は、国内はもとよりヨーロッパなどでも演奏され、日本マンドリン独奏コンクール、ARTE 国際マンドリンフェスティバル＆コンクール、ヨーロッパ国際マンドリンコンクール、ルクセンブルク国際マンドリンコンクール等の課題曲としても選定されている。多くの作品が Joachim-Trekel-Musikverlag（ドイツ・ハンブルク）より出版されている。

日本作曲家協議会（JFC）に所属し、「日本の作曲家 2021」,「アジア音楽祭 2022 in Kawasaki」など多くのコンサートで管弦楽楽器のための作品を発表している。全国高等学校ギター・マンドリン音楽コンクール、日本マンドリン独奏 コンクール、ARTE 国際マンドリンフェスティバル＆コンクールなど、多くのコンクールで審査員を務める。三重大学保健管理センター教授。医学博士。内科医として勤務しながら、医学と音楽の両立を常に目指している。

## 向井響 Hibiki Mukai

第 6 回マータン・ギヴォル国際作曲コンクール、第 33 回 ACL 青年作曲賞、ORDA2019 作曲賞、各第 1 位。2018 年ストラスブール現代音楽祭にて最優秀賞、2020 年マリン・ゴレミノフ国際作曲賞を受賞。第 84 回日本音楽コンクール作曲部門第 1 位。桐朋学園大学卒業。ハーグ王立音楽院ソノロジー研究所修了。現在、文化庁新進芸術家海外研修員として、ポルト大学大学院博士課程に在籍。

主な作品に「機械の肌 5」（NHK 委嘱）、「人魚姫に別れを告げて」（ストラスブール現代音楽祭委嘱）など。